

# 長谷川慶幸 学位論文審査要旨

主 査 大 槻 明 広  
副主査 萩 野 浩  
同 片 岡 英 幸

## 主論文

Bystanders' willingness to perform basic life support and its relationship with facilitative and obstructive factors: a nationwide survey in Japan

(バイスタンダーのBLS実施意志とそれに関連する促進・抑制要因：日本における全国調査)

(著者：長谷川慶幸、花木啓一)

令和5年 Yonago Acta Medica 66巻 67頁～77頁

## 参考論文

1. Factors related to young people's willingness to perform basic life support

(若年者のBLS実施意志の関連要因)

(著者：長谷川慶幸、花木啓一)

令和5年 Yonago Acta Medica 66巻 120頁～128頁

# 学 位 論 文 要 旨

Bystanders' willingness to perform basic life support and its relationship with facilitative and obstructive factors: A nationwide survey in Japan

(バイスタンダーのBLS実施意志とそれに関連する促進・抑制要因:日本における全国調査)

院外心停止傷病者へbasic life support (BLS) が行われた場合、救命率が大幅に向上するとされているが、実施率が低いことが問題になっている。本研究ではBLS実施意志の強さとその促進要因、抑制要因との関係を明らかにし、通りすがりの人(バイスタンダー)によるBLS実施率を高めるための示唆を得ることを目的とした。

## 方 法

日本に居住し、研究参加に同意した15歳～65歳の男女で、BLSの実施経験がない1000人と経験がある101人を参加者とした。BLSアルゴリズムの主要な3行動 [i) 状況を確認する、ii) 援助を要請する、iii) 救命処置をする] より採用した質問項目を用いて、BLS実施意志の強さを4件法で評価した。社会心理学において人助けの心理状況に用いられる援助行動理論に基づいて設定した実施意志の促進要因候補 (A: BLS実施の能力・経験の充足、B: 自分のメリット、C: 傷病者のメリット、D: 個人の行動基準となる価値観、E: 傷病者との心理的距離の近さ、F: BLSについての正のイメージ) と抑制要因候補 (a: BLS実施の能力・経験の不足、b: 自分のデメリット、c: 傷病者のデメリット、d: 無関心、e: 傷病者との心理的距離の遠さ、f: BLSについての負のイメージ) への適合度を評価し、BLS実施意志への関連を解析した。2群間の比較にはBonferroni補正を用いたMann-WhitneyのU検定、多変量の解析にはロジスティック回帰分析を用いた。  $p < 0.05$  を統計学的有意とした。

## 結 果

BLS実施意志あり群の割合は、経験なし群、あり群の両方で、行動ii) 援助を要請する、行動i) 状況を確認する、行動iii) 救命処置をするの順に低下した。説明変数として促進要因候補(A～F)の適合度スコア、目的変数として行動i)、ii)、iii)の実施意志の強さを設定し、経験なし群、あり群別にロジスティック回帰分析を行った。経験なし群では、行動i)は「A: BLS実施の能力・経験の充足」、「B: 自分のメリット」、「D: 個人の行動基準となる価値観」、「E: 傷病者との心理的距離の近さ」、行動ii)は「A: BLS実施の能力・経験

の充足」、「B:自分のメリット」、「D:個人の行動基準となる価値観」、行動iii)は、「D:個人の行動基準となる価値観」と有意に関連していた。経験あり群では、行動i)、ii)、iii)全てと「D:個人の行動基準となる価値観」が有意に関連していた。経験なし群とあり群の両方で、すべての実施意志と有意に関連していた促進要因候補は「D:個人の行動基準となる価値観」のみであった。同様に説明変数として抑制要因候補(a~f)への適合度スコア、目的変数として行動i)、ii)、iii)の実施意志の強さを設定し、経験なし群、あり群別にロジスティック回帰分析を行った。経験なし群では、実施意志と有意な関連を示す抑制要因は認めなかった。また経験あり群ではサンプル数が少ないため、同解析を実施しなかった。

## 考 察

BLS実施意志の強さは、傷病者への介入の度合いが高くなるほど低下することが明らかとなった。またBLSの実施能力や成功体験があると感じることは実施意志の促進要因であった。感情を揺さぶられる体験をすること、体験後に誰かと振り返ることがこの要因を強化するとされており、講習会では現場の状況を疑似体験することにより参加者の感情を揺さぶること、家族や友人と参加し一緒に振り返る場を提供することが有効であると考えられる。自分のメリットも促進要因であった。講習会では、BLS実施により表彰された記事を提示するなど、参加者がBLS実施のメリットを認識することが有効であると考えられる。また個人の行動基準となる価値観も、実施意志の促進要因であった。自身のコミュニティでBLSについて話し合う、BLSの体験談を聞く、BLSを疑似体験する等がこの要因の育成に有効である可能性が考えられる。特に院外心停止傷病者の救命に有効とされる傷病者への介入の度合いが高い行動の実施には個人の行動基準となる価値観が必要なことが本研究で明らかとなったので、個人の行動基準となる価値観を高めることは講習会の最終的目標と言える。傷病者との心理的距離の近さ、特に傷病者への恐れがないことも促進要因であった。バイスタンダーが感じるであろう傷病者への恐怖心や嫌悪感の原因について科学的根拠に基づいて説明し、誤解や偏見を解くことが重要であると考えられる。

## 結 論

BLS実施意志の強さは、傷病者への介入の度合いが高くなるほど低値であった。BLS実施意志の促進要因として、BLSの実施能力・経験の充足、自分のメリット、個人の行動基準となる価値観、傷病者との心理的距離の近さが明らかとなり、効果的なBLS講習会実施への示唆を得ることができた。